



どうやってインフォーマルケアを ケアプランに組み込むか(後編)

～柔軟な発想をもちつつ、

アンテナを少し高くする方法のススメ～

執筆▶ 三原 岳 株式会社ニッセイ基礎研究所 ヘルスケアリサーチセンター 上席研究員

利用者ができる限り自身の力で希望する生活を送れるようにするケアマネジメントには、フォーマルケアだけでなくインフォーマルケアも含めた広い視野でケアプランを作成するのが望ましい。前月号から2回に渡りニッセイ基礎研究所の三原岳氏にインフォーマルケアの基礎から実践を提示していただいている当コーナー。今号では、ケアプランにインフォーマルケアを組み込む実践方法を紹介していただく。「そんな方法があったのか!」と新たな気づきが得られるだろう。

1:はじめに

前号(2023年7月号)では、住民同士の支え合いの場などインフォーマルケアを巡る先行研究や制度上の位置づけなどを考察したうえで、現場のケアマネジャーが工夫しつつケアプランにインフォーマルケアを組み込んでいる点、それでも業務負担の重さを感じている点などを考察した。

今回はインフォーマルケアをケアプランに組み込むうえでのヒントを提示したい。具体的には、インフォーマルケアとフォーマルケアの違いに留意しつつ、利用者の暮らしから柔軟に発想すれば、いくらでも地域に資源は眠っている可能性を指摘する。さらに、住民やボランティアなどと支え合いのネットワークを構築する職種である「生活支援コーディネーター」との連携も提案する。

2:フォーマルサービスと インフォーマルケアの違い

まず、フォーマルサービスとインフォーマルケアを対比すると、**図表1**のとおり整理できると考えている(本稿におけるフォーマルサービスとインフォーマルケアの言葉の定義は前号を参照)。つまり、フォーマルサービスと違ってインフォーマルケアでは、行政が関わっていないか、関わっていたとしても関与が小さいため、自由度は高い。このため、日程や活動内容、メンバーなどを企業や住民の判断で変えられるなど、融通が利きやすい。その一方、「主催者の住民が入院した」「会場として利用していた建物を使えなくなった」などの事情で、通いの場がなくなるなど、安定的とはいえない面がある。

さらに、利用価格という点でも、フォーマルケアは介護報酬を通じて画

一的に決まっているが、インフォーマルケアは異なる。例えば、住民同士の支え合いは安価か、無償かもしれないし、企業のサービスの場合は高額になるケースも考えられる。

要するに、フォーマルサービスは行政による関与が強い分、画一的かつ安定的だが、インフォーマルケアほど融通が効きにくい。一方、インフォーマルケアの自由度は高いが、画一的かつ安定的とはいえない。こうした特性や違いを踏まえつつ、インフォーマルケアをケアプランに組み込む上で、ケアマネジャーには柔軟な発想が求められる。

3:石コロでさえ地域資源に?

その一例として、筆者が聞いた「石コロでさえ資源になる」という話を紹介したい。具体的には、家に引き籠もり気味だけど、石に綺麗な絵を描くことを趣味としている人に対し、石コロを持って